

「序文」と「反歌」に包まれて

——ヘンリー・ヴォーン小考（四）——

森 田 孟

バイブルに登場する無数の人物の中でも、イサク (Isaac) は、ヘブライの族長アブラハム (Abraham) とその妻サラ (Sarah) との間に、神に特別に祝福されて、この両親がそれぞれ百歳と九十歳の時に生れた彼らの独り子である（『創世記』21・1～5）。しかも神に試されて、父親から神への「焼かれる献げ物」(a burnt offering) にされることになってあわやという時に、躊躇うことなく我が子を生贄にしようとした父親を嘉して、神により救われた

（『創世記』22・1～18）正に、〈死〉から再生した人物なのだ。ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) が、〈死〉から再出発した自らの姿をイエス・キリストに報告する形で書き進めた「個人の叫び」の集成である『火花散

る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) で、神を求めようとする有様を描く「探索」“The Search”〔本誌前号27～30ページに訳出〕の次にイサクを、それも後に「イスラエル」と呼称されることになるヤコブ (Jacob) の父になるには不可欠の、その結婚を取り上げるのは、当然といえば当然だったであろう。イサクは何しろヘブライ語で、「笑い」という意味なのである。そのイサクをヴォーンは、「真実どおりを描く」こうとする。

イサクの結婚 *Isaacs Marriage*

「創世記」第二十四章第六十三節⁽¹⁾

そこでイサクは夕暮時になると野原へ祈りに出かけ、眼を上げて眺めると、ラクダがやって来るのが見えた。

祈っている？結婚するため？それは珍しいことだったが今では途方もないことだ、それに信仰心からの気遣いは我々自身へのものであれ 余りにも時代遅れなのでそれを再び始めるのは墮落することだった。しかしそなたは〈選ばれた〉生贄とされて早々と天界に捧げられたので

そなたの炎は消えるわけにはいかなかった、〈宗教〉がそなたに光り輝いた、光線が玻璃に差し込むように、そこではそなたが生長するにつれて 宗教がそなたの心の聖なる〈星座〉を増やし輝やかせた。

しかし花嫁を求めてのものとなると 祈り⁽²⁾は酷く非難されるやり方なので 確かに流行り^{はや}はしなかった。

誓いはしなかったのか？〈補足物〉も？ そなたは奇妙にも鈍い求婚者だったのだ、そなたにはなかったのだらうか

今の我らの時代の手際が、そなたなら自ら新たに二十幾つ誓いの詞^{ことば}を作り出せたであろうし、〈補足物〉なら十分

(すぎるほど)にも、

おお 悲しく しかも奔放な行き過ぎよ！ だから幸せだったのだ

あの純白な日々は、不敵にも不信心な浮かれ騒ぎをさらけ出した⁽³⁾りしなかったし！

〈良心〉を卑しく用いて分別を失くしたりせず

厚かましい風習が〈無垢〉を追い払うこともなかった時、そなたは伴わなかったのだ 仰々しいお供も不必要な騒々しい

お付を従えた若い陽気な宣誓者の〈おどけた〉群も。

〈全て〉はここではそなたの花嫁のように和やかだったし 穏やかだった 彼女のように あるいはあの温和な〈夕暮れ時〉のように。

それでもそなたには もっと気高いお客がいた、〈御使いがた〉が絡みつき

うろついていたのだ そなたの周りを、心の守護者として こういう彼らがそなたに家まで花嫁をわざわざ連れてきてくれたのだし 道中ずっと

そなたの召使に何を為し何を言えばよいか助言したのだ、

こういう彼らが彼に井戸端で教え諭したのだし、あそこへ
伴ったのだ

〔貞淑な処女^{おとめ}〕を、そなたの思い描いた愛らしい対象を、
しかしここでは〔補足物〕は決してなかったし、洒落たと
ころも

なく、卑屈な追従や学び取った外觀も身につけておらず
全ては簡素で慎しやかな真実だけだった、彼女がやってき
た時

〔髪を巻毛〕に身体を揺すって厳かに無口のままの気取っ
た小股歩きではなく

〔処女^{おとめ}〕の生来の羞じらいで頬を染め 不安そうだった
その瑞々しさといったら 夜明けが帯びるあの薔薇色その
ものだった⁽⁴⁾。

おお 素晴しく神々しい簡素！ おお 優雅よ

〔巻毛の〕房髪や厚化粧の顔ではとても及べない！

〔水瓶〕も彼女は抱えていて それを持ち運ぶことを
負担とは思わなかった、触れるのを軽蔑しそうな人もいる
だろうに、

それを手にして穏やかな淑やかな言葉で 彼女は 是非
お飲み下さいと彼に頼み、彼の〔駱駝の各々〕にも薦めた

のだった。

それで今 そなたは彼女がやって来るのを知った、〔時〕
が来たのだ

そなたに翼が備わって 敬虔の念からそなたの
〔神〕の許へと昇ってゆく時が、〔結婚〕とはどの状態でも

殆どが不幸になるか 殆どが幸福になるかなのだから、
こういうことにそなたはなったのだ、そこで今やそなたは
己が魂から

衣服を剥ぎ取った、それで風切り羽も新たにその魂は
疲れ切った翼を再生し、それで回復して飛んでいったのだ
星々の上を、未知の軌道の上を高々と

そして貫き通さんばかりに飛翔して空気を芳しくした
〔没薬^{ミルラ}〕とそなたの祈りの香煙を振り撒きながら。

それでライ・ロイ⁽⁶⁾の〔井戸〕から何かしら香ばしい雲が
〔太陽〕にせがまれ膨れ上って彼の経帷子になろうとし、
彼の湿った子宮から芳しい驟雨の涙が滴ると

それは何千箇もの真珠となって散らばり 草花の
一本一本を分かち合う、とこうするうち しばらくそのま
まだと見るまに

何かが 干上がって渴いている〔小島〕を冷やした、

有難く思ったその〈大地〉は自らの錠を開けて何千という
匂いを
混ぜ合わせ、それを（すっかり混ざり切ったのを）送り出
すのだ

一片の雲に乗せて、そうして空に返すのだ
空から借りていたあの露を 息を吹き返すための生贄だっ
たのを。

こうしてそなたの魂は舞い上がったが、（若いのに）自
らの血と共に

己が父の霊も受け継いだのだ

その活気溢るる熱意と試された信仰は そなたには

〈幼い頃〉からずっと馴染みのものだった。

他の者なら時を決められ、それに合せるように仕込まれる

のだが そなたは

神を敬いながら 己の速く過ぎ去る年月より速く成長して
重ねゆく齡と共に年月を崇めるべきものとし、雪を戴く頭

となったが

そなたがそうだったので その時以来彼の雪は滑り落ちる
ことになった、

だから そなたを真実どおりに描写しようとするなら描か

なければならぬ

まず 一人の若い〈族長〉を、それから一人の結婚した
〈聖者〉を。 [M・四〇八—一〇]

訳注

- (1) 欽定訳版の“mediate”「瞑想する」の代りに初期の版（例えば一六二二年の）などの欄外に挙げられていた“pray”「祈る」を用い、“blinded”の代りに初期の版で過去形として使われてくる“bl”を保持してゐる[F・一五四]。
- (2) prayer was such/A decayed course, sure it prevail'd not much. 一六五〇年版では“sure, prayer was/Very strange stuffe wherewith to court thy lasse.”「確かに祈りは／恋人に求婚するには甚だ奇妙な振舞いだった」[M・四八〇]。
- (3) When Conscience by lew'd use had not lost sense. 一六五〇年版では“When sinne, by sinning oft, had not lost sense.”「罪は、しばしば罪を犯すこととで分別を失くしたりせず」[同]。
- (4) But in a Virgins native blush and fears/Fresh as those roses, which the day-spring wears. 一六五〇年版では“But in a frighted, virgin-blush approach'd/Fresh as the morning, when 'tis newly Coach'd.”「怯えた処女の羞じらいを頬を染めて近付いてきた／瑞々しくも新たに馬車で運ばれ

てきたばかりの朝のようだった」「M・四〇九」。

(5) イサクの花嫁を探し求めにその父アブラハムから派遣された僕。(「創世記」24・18〜20)。

(6) *Lahai-roi's Well*. この箇所は一六五〇年版では星印*があつて、53〜61行の右側余白に以下の如く斜字体で作者自身の注記がある。「ヤコブが住んでいた南部地方「ネゲブ」の、カデシユとベレドとの間にある井戸。「ヘブライ人への手紙」住んでいて私を見た彼の井戸」「M・四〇九、F・一五五」。「ヘブライ人への手紙」には旧約聖書の主要事を復習している趣が見られるが、その欽定訳には、本稿筆者は、井戸への言及を見い出せない。

(7) his. [O]、[JH]、グロスアト (Rev. Alexander B. Grosart) 編著 (The Fuller Worthies Library, 1871)、及び、タリー (W.A. Lewis Betany) の序論付編著 (London: Blackie, 1905) では“her”「彼女の」[M・四〇九]。

「創世記」第二十四章は、イサクとリベカ (Rebekah) の結婚が話柄なのだが、それとこの詩とを較べて一目瞭然なのは、驚嘆すべきヴォーンの想像力と表現の豊かさであろう。バイブルでは淡白な二人の姿が、この詩で何と生彩を放っていることか。訳注(1)でフォウグルが注意を喚起するとおり、作者は欽定訳版の、野原に「瞑想しに」ゆ

くとあるのを「祈りに」ゆくと変えておいて、結婚するのに祈るのは時代遅れだ、と始めることからイサクの結婚について瞑想を繰り展げる。如何にもヴォーンらしい、ずい分手の込んだ手法だ。

訳注(2)、(3)、(4)にみられるとおり、最終版(一六五五年刊)と一六五〇年版とは比較的大きな詩句の変更が三箇所ある。初めの二箇所は概ね妥当な推敲であろう。祈りが「奇妙な振舞い」とだけいうよりは「非難されるやり方なので流行らなかつた」のほうが「確かに」よく判る。分別を失くすのが「罪を犯すことで」よりは「〈良心〉を卑しく用いて」のほうが非凡な表現だし、作者が仮托して披露したい当代の状況への批判を一層具体的に表しているだろう。しかし(4)はどうか。乙女が羞じらいによって頬を染める瑞々しさを「馬車で運ばれてきたばかりの朝」に譬えるほうが、「夜明けが帯びる薔薇色」だと言うのよりは遙かに新鮮に響くが、ギリシャ神話のパエトーン (Phaethon) を連想させるような表現は、当時ではむしろ常套句クリシェに近かつたのかも知れない。それにこの太陽神ヘリオス (Helios) の息子は、父から借りた日輪の車の操作を誤って地球に接近しすぎ、ゼウスに打ち倒されたのだから

ら、荒々しく騒々しい心象であり、慎しく優雅なレベカには相応しくない。「夜明けの薔薇色」はこの場合、決して平凡ということにはなるまい。イサクの花嫁にびつたり瑞々しさを表して間然する所がなく、やはり行き届いた語句の練り直しだった。

訳注(7)で指摘されたテクストの編者たちは、皆、「子宮」とあるのだからここは女性だとばかりに、ヴォーンの原典の「彼の」を「彼女の」に変えたとみえる。微苦笑を禁じ得ないが(「C」までそうだとは「Et tu, Chant-Bers!」「チェンバース教授、御身もか!」)、重要な注記を惜しまないフォウゲル版(F)は無論、無視している。夫にとって妻の身体は毛髪の中から四肢の端々に到るまで全て「妻その人」なのだから、「彼の湿った子宮」*his moïst wunde*とは豊饒な妻を表す提喻に他ならない。形而上詩人のヴォーンにとつては、およそ譬喩とも修辞とも言えない表現にすぎない。問題はむしろこの辺りの「彼」は誰を指すかであろう。

この詩の冒頭のエピグラフでイサクが目にする駱駝は、父のアブラハムの僕が連れ帰ってきたもので、それにイサクの花嫁になる筈のリベカが乗っていた。この時イサクは

「ラハイ・ロイの井戸」から帰ってきたところだった。と
言って、それまで「そなた」と呼ばれていたイサクがこ
で突然「彼」にはなるまい。この「彼」は、イサクの父の
アブラハムであり、「彼の子宮」はサラも含まれようが、
むしろサラの死後再婚したケトラ(Keturah)を指すだろ
うか。彼女は六人出産しており(創世記 25・2〜4)そ
の子孫は豊饒である。あるいは、訳注(6)の作者自身の
注記及び、「創世記」(27〜35章)のヤコブ(妻二人とそれ
ぞれの召使との間に計十二人の子福者)イスラエル十二部
族の先祖となる)に関する記述から推して、彼を指すとも
みられないわけではなからう。この箇所、本稿筆者の脳裡
には、イサクと共にその父と息子のイメージが二重三重映
しになって点滅する。彼らはイスラエルの先祖の、族長の、
三人なのである。

因に、イサクが従兄弟の娘に当るリベカと結婚するのは
四十歳の時であり、六十歳で双生児のエサウ(Esau)と
ヤコブの父になる。野の人となり巧みな狩人になるエサウ
をイサクが、穏やかな人柄で天幕の周りで働くヤコブをリ
ベカが、それぞれ主に愛した。ヤコブには先刻も触れたよ
うに妻が二人(レア[Leah]とラケル[Rachel])いた。

ヴォーン自身は双生児の一人であり、生涯に二度結婚している。最初の妻との間に四人の子供が生まれ、彼女の死後その妹と再婚して更に四人の子女を儲ける人物である。だから何だと言うのではない。唯、そのような作者が脳裡に胸中に想い描いたのがこの詩の中のイサクであり、彼の結婚だったということである。

「宗教」「Religion」（本誌第二〇〇号五六―五九ページ）で英国の信仰心の衰退を嘆いた「H・一二二」ヴォーンは、ベセルの言う「族長の時代」「Paternal times」「Ps・一五四」である「純白な日々」「white days」——「探索」「The Search」でも憧憬されていた「清浄な日々」（と、あそこ「二五―二六行」では拙訳した）——を引き合いに出しながら、自らの思いを（笑い）であるイサクに仮托して、当代の英国の真情を凝視したのだった。「笑いは最良の薬」「Laughter is the best medicine.」と諺にもある。ヴォーンは後年実際に、医師として活動した。

この詩の中に、無冠詞、複数形、単数形各一度ずつ計三回、〈補足物〉（Complement）が出てくる。当代の現状の歪みや欠陥を「補って完全にするもの」である〈補足物〉の必要を、この作品の語り手は痛感していたに相違ない。

彼にとって特に、およそ（笑い）とは程遠い憂うべき現状は、清教徒と英国国教徒との（宗教上というよりむしろ大いに政治上の）争乱下にある英国教会の咎であった。「イサクの結婚」に引き続き次の作品が登場するのも、誠に当然だと思われる。

英国教会 The British Church

ああ！ 彼は見棄てられた！

だから（こ）でこのように事態がその霧と影を生み出す間⁽¹⁾

我が莊嚴なる頭は

あの（ミルラ）の丘陵⁽²⁾にあつて（芳香）を凝視めるのだ。⁽³⁾

さあ急ごう 愛しい人よ、

ここで（兵士たち）は

再び運命に翻弄⁽⁴⁾されて

あのユダヤ人たちが触れなかった

縫い目なき上衣を罰当りにも

こうして引き裂き、汚すのだから。⁽⁵⁾

おお そなた 翼を備えよ！

それとも もし未だ（これらの雲が分れて

一日が溢れ出すまで）

そなたが今居る所に留まるのが良いと思うなら

書くがよい そなたの書物に

私の腑抜けた表情を

屠られた羊の群と掠奪された羊毛を、

そうしてそなたは成ったのだ

芳しい草の山々に登った

年若い（ノロジカ⁽⁶⁾）のように。

おお 野の薔薇よ！ 谷々の百合よ！ 何と汝は今 野の

猪どもの食物となることか！

[M・四一〇]

訳注

(1) hatch. まず「孵化する」の意がある。

(2) hills of Mirthe. 「サンデイズ」「Son-days」[M・四四七]

十四行目に同じ表現が、「樹液」「The Sap」[M・四七五]

十一行目に“an hill of myrth”がある [M・七三〇]。

(3) 「雅歌」4・6 「私はミルラの山へ、乳香の丘に登ろう」

[F・一五六]。

(4) Cast in their lots again. バイブルでの話なら「籤を引き合つて」となるが、ここでは“lots”の別の意「運命」を探つてみることにした。

(5) 「マタイによる福音書」27・35及び「ヨハネによる福音書」19・23^{***}24は、キリストの磔刑の場でのローマ兵たちの行動を描きながら、「詩篇」22・18「彼らは私の着物を分け合つて、私の衣服のことで籤を引く」に言及し返す [F・一五六]。

「彼らはイエスを十字架につけると籤を引いてその服を分け合い」。「兵士たちはイエスを十字架につけてからその服を取り四つに分け、各自一つずつ渡るようにした。下着も取ったがそれは縫い目がなく上から下まで一枚織りであったので、これは裂かずに籤引きで決めようと話し合つた」。

(6) 「雅歌」8・14「恋しい人よ、急ぎましよう、かもしかや子鹿のように香草の山々に」[F・一五七]。尚、この詩では“a young Roe”の“roe”は“roe deer”以外の別の意味「魚卵」が二行目の、訳注(1)に記したように“hatch”「孵化する」と呼応して溶明の如く浮上して来ないであろうか。それに「魚」「fish」は初期のキリスト教徒にはキリ

ストの象徴として使用されたものである (cf. Brewer's *Dictionary of Phrase and Fable*, London: Cassell, 1970)。

(7) ラテン語。明らかに「雅歌」2・1「私はシャロンの薔薇、野の百合」と「詩篇」80・13「森から出てきて猪がこれを食い荒らし、野の獣がこれを貪り食う」の混交したもの。ハッチンソンは指摘する (H・一二二の注4)、ヴォーンはトレメリウスのラテン語訳聖書から「バラ」を採ってきたもので、ウルガタ「聖ヒエロニムスが四世紀末に翻訳したラテン語訳聖書」では「花」になっていると。後者で「野の花」となっている箇所は前者では「シャロンのバラ」になっており、この詩末尾のヴォーンのラテン語は、上記両者を交錯させてジュネーヴ版聖書の「野の薔薇」に相当するラテン語にしたもの。ジュネーヴ版「詩篇」80・13の「猪」の欄外注には「即ち、我らの宗教を憎む者は我々人間を憎む者」とある。ヴォーンは、反ロード派の人々 (the anti-Laudians) を念頭に置いているように見受けられる [F・一五七]。ウィリアム・ロード (William Laud, 1573-1645) は、カンタベリー大主教 (1633-4) だった英国の聖職者で、清教徒主義を弾圧し、結局、反逆罪で処刑された。

[M・七三〇] は、「エゼキエル書」29・5、34・5、39・4、及び「サムエル記上」17・44、46への連想を示唆する。そこには、「私はお前を荒れ野に捨てて…野の獸、

空の鳥に食物として与える」「彼らは飼う者がいないので散らされて野の獸の餌食となった」「私はお前をあらゆる種類の猛禽と野獸の餌食として与え貪らせる」「お前の肉を空の鳥、野の獸にくれてやろう」などとある。

この詩でヴォーンは、とハッチンソンは言う、「(ここ)で〈兵士たち〉は」大胆にもキリストの「縫い目なき上衣」を分割し汚してしまったのだと嘆き、この詩の最後に「雅歌」から組み立てた一節を引用することで、教会の祝祭と断食の儀式を古くから愛する人として、クリスマスと受難日 (Good Friday) の遵守が禁じられたことを憤るのだ [H・一二二―一二三] と。

この種のだけに限らない、おそらく己自身に対する〈憤り〉までも静かに激しく秘めているのがヴォーンの詩だと看做したいが、先走るのは控えよう。

この詩ではキリスト磔刑の鮮烈な場面が喚起されたが、「縫い目なき上衣」は、『火花散る燧石』を締め括る作品「反歌」にも登場する。それ故というわけではないが、この辺りで、これまでこの詩集を巻頭から順に眺めてきた眼を最後の部分に転じてみたい。どこへ向かって縫い上げら

れてゆくのか少し先回りして、「反歌」までの最後の作品を四篇順に見てみよう。

疑問 The Queer (1)

おお 教えたまえ、あの喜びはどこから噴き出るのか？

食物が天与の申し分のないもので

結婚指輪をはめたような天上の装いで

疑念と絶望を踏みつける喜びは。

〈東方〉への行き来で扱う喜びはいずこから？

爽快な際限ない〈蒼穹の〉主題を

山なす香辛料を 明るい〈夜明けの星々〉を

緑の生命の木々を 澁瀬たる流れを。

教えたまえ、おお 教えて、誰がそなたをここへ

連れてきて、私の知らぬまに、落ち着かせたのか

そなたが翼を未だ備えるほどに成らないうちに、

眼のあるそれも感じ取れる眼のある翼を。

成る程、神聖だ、あの〈磁石〉は、

やはり〈愛〉だ、あの〈魅惑〉は、そなたを口説き落とすのだから、

めったに知る人のいないそなたを知るとい

はなはだ並外れた至福を生み出すのだから。

[M・五三九]

訳注

(1) “Query”「質問、疑問」の意。“Queer”のこの意味は、OEDには記載されていない[M・七五二]。その後も依然として Supplement にも未記載である。

“query” or “puzl”の意 [M・三四六]。

長短一三〇篇に垂んとする作品を連ねて来た拳句最後の部分で、まだこの作者は、疑問・質問を呈して、〈磁石〉である〈愛〉を讃え、「疑念と絶望を踏みつける喜び」を求め続けるのである。「そなた」とはこの「喜び」のことであり、それを地上の「私」にもたらずのは誰かという疑問によって〈神〉を讃美する。そして次の作品となる。

永遠なる〈神〉よ！ 人間の墮落以来

地上で生きてきたあらゆるものの創造者、

年古りし〈岩〉！ その陰の中で

彼らは目に見えぬまま生きている、地上で消えても。

御身は御存知だった、このパピルスを、それが

単なる種子で、その後、草になった時に、

それが手入れされたり、繊維にされたりする前に

そして亜麻布にされると、それを身に着けたのだから、

彼らの生命、思考、行為がどのようなものか

どこまで良質の穀粒なのか、稔りなき雑草なのかを。

御身は御存知だった、この〈木〉を、緑の陰に

覆われていた時、というのも〈表紙〉¹はそれから作られて

いたので

それにそれがどこで繁茂し成育し広がってゆくのかを

まるで決して死滅する筈がないかのように。

御身は御存知だった、この無害な獣を、彼が御身の命令によって、各々緑の物を

食べて生きて、それから（満腹して）眠ろうと

この皮膚にくるまった時に、それが今拵げているのだ

この年古りし書物の上に〈覆い被さるもの〉を、

それで私は事情が分って嘆きながら思い巡らすのだ

私自身の塵に、単なる塵ではあるが

これほど乾いて澄んだものはない。

御身は御覧になり御存知だった、これらを悉く、そして

今こうして散らばっているが、現にそうだと御存知なのだ。

おお、物の分かった輝かしい精霊よ！ 御身が

木々を獣たちを人間を復活させる時、

御身が死と苦痛だけを滅ぼして

あらゆるものを再び新しくする時、

御身の創り賜うたものの中に一つの地位を与えたまえ

それらの中で御身のお顔を愛し探し求めた者に！

[M・五四〇]

訳注

(1) 初期の書物の多くは木製の表紙だった「F・三四七」。

書物は、ベセルの指摘どおり、あの時代にヴォーンのような篤学な病弱者にとっては最も馴染み深いものだったであらう（BS・一五九）。その書物について彼は、改めて瞑想し、書物に「全ては再び立ち上る筈の多くの生物の塵が堆積しているのを見る」（同）。本の表紙には、子牛（羊、山羊）などの獣の鞣皮も使うが、第四連はそれへの言及である。

ハッチンソンはこの詩の最終連を、「使徒行伝」3・21に言う「万物更新の時」に対するヴォーンの寛やかな解釈だと見ており、「この観念をこれ程までに発展させたキリスト教徒の思索家は余りいない」とまで賞讃する（H・一七六）が、ヴォーンにとって究極の書物となれば、当然バイブルであった。聖書への思いで詩集全篇を締め括る所以であらう。

聖書 To the Holy Bible

おお 書物！ 人生の案内人！ どうして手離せよう、
そなたはこれほどまで長らく 私の心を捉えてきたのだ！
この最後の接吻を受け取って、そなたへの

心からの感謝の涙を流させたまえ、私が眠る前に。

そなたが初めて我が手に置かれた時

私はまだ理解できなかつたし

毎日若々しい眼で文字を追うように

なつたのは、読むことを覚えてからだつた。

しかし向う見ずな若者が一たび強く育つと

〈乳母〉の手許から群衆の中へと飛び立って

そこで新たに〈配偶者〉を選び

傷つくか病むかするまでしがみつくように

そなたから得たあの最初の光で

私は虚栄を求めて走り出し

浮萍を黄金だと呼ばわって 思いもしなかつたのだ

最初に易易と得た〈書物〉だけが私の探し求めたものだつ

たのだとは。

長いことこの流れが支配した、それで投げ棄てられていた

そなたは

おやおず啞然たる表情で私の眼に訴えかけ

しばしば明らかに運び込んだものだった

いきなりこの上なき探照光線

私の魂の中へ、それでその相も変らず磨きをかける

素早い手触りと 私は大いに奮闘したのだ。

遂にこの穏やかな愛の術⁽¹⁾によって

そなたは私の罪深い力を抑えつけて

私を家庭へと連れてきて そこで私に

見せてくれたのだ 私が他の所で探し求めたあの真珠⁽²⁾を。

喜びと平和と希望と愛とは

あの〈鳩〉の密かなお気に入り、

彼女の 人を活気づける親切、微笑み、接吻、

数々の気高い楽しみ、この上ない至福、

結実、合体、栄光、生命へと

そなたは導いていったのに、しかも尚、全ては反目し合っ

たままだ。

生きている時は、そなたは私の魂の確かな安らぎであり

死に臨んでは、私を平和の裡⁽³⁾に逝かせてくれる、

そなたの次の〈効能〉を語れる言葉はないのだ、

さらばだ おお〈神〉の書物よ！さらば！

「ルカによる福音書」第二章第十四節⁽³⁾

いと高き所では栄光 神にあれ、地にあつては人々に

平和と御^{みこころ}、心を。

〔M・五四〇—四一〕

訳注

(1) art of love. 「マクダラのマリヤ」“Saint Mary Magdalen”

(M・五〇七—九)の四九行目に“Art of love”が、ハー

バートの「感謝祈禱」(G. Herbert, “The Thanksgiving”)

の四七行目にも同じ句がある〔M・七五一、七四九〕。

(2) 「マタイによる福音書」13・45、46の高価な真珠〔F・

三四八〕。「また、天国は良い真珠を捜している商人のよう

なものである。高価な真珠一個を見いだすと出かけて行っ

て持ち物を皆売り払い、そしてこれを買うのである。〔F・三四

九〕

各行全て八音節から成る、二行ずつ対で韻を踏むカブレ

ットの計三六行のこの作品、非キリスト教徒の筆者にも宗

教とは無関係に、実に佳い詩だと感じられる。生涯に一冊

ではなくとも、その時々々に〈聖〉書だと思ふ書物は、我々

の誰にもあるだろう。さらばと別れを告げる余韻に浸るう

ちに、作中の「愛の術」が同じく言及される別の一篇を、

「反歌」の前にここに喚び出したくなった。集中、「イサク

の結婚」と双壁かとも思われる次の作品である。

マグダラのマリア St. Mary Magdalen

親愛なる麗しい〈聖者〉！ 純然たる裸の
装いの昼日中よりも白く明るい、

涙を流した時のそなたときたら 露もしとどに

この世のものとも思えない朝の花々よりも瑞々しい。

何たるそなたの変わりよう！ 何と澆測と美しい

喜ばしい清浄無垢な様子が

鏡で自ら磨いたのではなく 自然に純粹に

思うさまそなたの中に 今 輝いていることか！

ところが 今なお瑞々しく花の盛りの

美しさを保っているのに何故そなたは泣き悲しむのか？

この 涙と溜息の薄暗い状態では

あの 笑いに満ちた年月など思うべくもなかった

当時は〈マグダラ〉城がそなたの邸宅だった日々⁽¹⁾

何から何まで贅を凝らしたためにない整いぶりだった。

どうして今はこの〈髪〉が蔑まれているのか？

かつてはそなたの行き届いた手際が示されていたものを、

その時誰が それ程慈しまれていたその玩具を

手入れして〈渦巻〉、〈地球儀〉、艶かしい怒り〈巻き髪〉
に結ったのか？

それらは熟練の手抜きによつて振り撒かれたようだ

そなたの好奇心をそそる自然な若々しい頭の周りに。

何故これほど沢山、この〈純正〉〈甘松油〉⁽²⁾が

零れていて、その箱はすっかり壊れて傷ついているのか？

如何なる美しい不機嫌のせいで そなたの従順な手が

こういう無駄をする羽目になったのか？

何故そなたはこれ程まで謙虚で 地に

付くほど低く 愛らしい頭を下げるのか？

親愛なる〈魂〉よ！ 承知なのだね、ここ地上では花々は

〈主〉の足台で生れることを

それ故そなたは萎れた自らを大急ぎで

彼の御方の聖なる足下に投げ込んだのだ

この緑の木の根方で

己の酷い衰えぶりが回復されるようにと。

そなたの奇妙なまでの稀なる虚栄心なのだ、

芳しい軟膏を念入りに保存していて

それも散財して買い入れていたのを（連中からは治療も

慰めも得られないと分った時にだが）

賢くも早目の〈悔い改め〉のように

そなたは悲しみながら彼の御方に差し出したのだ、

その 仲を取り持つ柔和で穏やかな

血は 世界の万能薬〈芳香軟膏〉。

これが、この〈神からの強壯剤〉が

そなたの涙を呼び出し、それが活き活き

はらはら滴り流れたのだ、まるで涙には

〈その〈主〉が真近だった〉喜ぶ感覚があるみたいに。

学ぶがよい、〈貴婦人がた〉よ、ここでは信仰篤い治療が

美しさを長持ちさせ、瑞々しく清らかにするのだ、

学ぶがよい、〈マリアの〉涙の術を、それから

言おう、あなたは人々から勝利をもらったのだと。

安上がりで強力な〈術〉！ 彼女の愛の〈術〉、

多く愛して 更に多くを感動させられた人のだ、

彼女の〈術〉！ その思い出は長く続かなければならない

― 真実が世の隅々に行き渡るまで

あの御方の悪用され蔑まれた炎が

その出所だった〈天国〉に戻るまで、

破壊をあの御方の赤らんだ翼に

もたらすことになる火を送り返すまで。

彼女の〈術〉！ その憂いに沈んで涙を流す目は

かつては罪の奔放で誘い惑わす密偵だったものが

今では恒星となり、その光は

酷い暗闇の放浪者に視力を与える助けとなっている。

自慢屋の〈パリサイ人〉！ どれ程盲目の

〈判事〉だったことか、汝は、しかも どの位不親切だっ

たか。

不可能だったのだ、汝のような

嘘偽りだらけの者が真物の悲嘆を知るなんて、

汝の偽りの眼に宿るあの嫌な分泌物で

彼女の誠実な涙を判定するのは公正だろうか？

この〈女〉は（と汝は言う）罪人だ と、

そしてそこに座った 比類ない人として 汝の宴に？

行きなさい 〈ライを病む人〉よ、行つて洗いなさい 汝

の身体が

子供のからだのように染み一つなく 瑞々しくなるまで、

彼は依然としてライを病んでおり、その事が活写するのだからを（聖人と看做す）人々、彼らは（聖人）ではないと。

【M・五〇七—九】

訳注

(1) 伝説では、マグダラのマリアをベタニアのマリアと同定して、前者に高貴な血統を与えている。彼女の名前は評判では、ベタニア (Bethany) 「ヨルダン西部、エルサレム東方のオリーブ山麓にある旧村」とナザレ (Nazareth) 「イスラエル北部の町、イエス・キリストの故郷」からニマイルの所にあるマグダロ (Magdalo) の城に由来しており、その城に姉のマルタ (Martha) と弟のラザロ (Lazarus) と共に居住していた【F・三〇四】。

(2) *Psitic Nard*. マリアがイエスの足に塗布した甘松油 (spikenard) 「ナルドの香油」。“*Psitic*”は「*εὐ·*·*·*·**」による福音書」12・3と「マルコによる福音書」14・3のギリシヤ語から訳されている、恐らくは地方での名称。人によって「純正の」(genuine) とか「液体の」(liquid) と同じだとされる。欽定訳聖書の一六二二年版では「マルコによる福音書」14・3の欄外注で「純粹な (pure) ナルド (nard) か、液体のナルド」とある【同】。“*spikenard*”は、インド産のオミナエシ科の芳香植物、古代人の珍重したナ

ルドの木と信じられており、彼らの使用した軟膏の原料。
* 「その時マリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を一ポンド持ってきて、イエスの足に塗り、自らの髪でその足を拭いた。家は香油の香で満たされた」。

** 「イエスがベタニアでライ病患者シモンの家において食事中、一人の女が純粹で非常に高価なナルドの香油入り石膏の箱を持ってきてそれを壊し、香油をイエスの頭上に注いだ。」

(3) フォウゲル版は行頭を下げている【F・三〇四】。

(4) *Art of love*. 「聖書に」の訳注(1) 参照。

(5) 「ルカによる福音書」7・47 「彼女の罪は多かったが許された、彼女が大きな愛を示したからである」【F・三〇五】。

因に、ドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』第二篇第六には、フォードルがヨシフに、この箇所へ言及して、貶された女性を弁護して沸騰する場面があり、印象深い。

(6) *Self-boasting Pharisee*. イエスを食事に招いたパリサイ人のシモン「ルカによる福音書」7・36〜50) のことで、ヴォーンによって以下の注(8) のように「マタイによる福音書」26・6と「マルコによる福音書」14・3の、ライを病むシモンのことだと受け取られている【F・三〇五】。
(7) フォウゲル版テキストではこの行間なく、最終連は十二行【同】。

(8) 訳注(6) 参照「M・七四九」。

(9) ライ病患者のナアマンは「神の人の言葉どおりに下って
いって」ヨルダン川に七度身を浸すと「彼の身体は元に戻
って小さい子供の身体のようになり、清くなった」(列王
紀下) 5・14) 「F・三〇六」。

マグダラのマリアは、キリストによって悪霊を取り除か
れた(ルカによる福音書) 8・2) が、伝説としては罪を悔
いてキリストに許された女性と同一視されている(「同」
7・37〜50)。この詩でもヴォーンの華麗な想像力は遺憾な
く發揮されているのが見て取れよう。「虹」(本誌第二〇〇
号五二―五四ページ)直前の作品なので、それと共に改めて
考察したい。今は、『火花散る燧石』の全体を締め括って
掉尾を飾る作品、ベセルがいみじくも「あらゆる生命を理
解するための鍵が存在する最終の変容・転換を迎えようと
適切にも飛翔する」(BS・一六〇)と述べた「反歌」をみ
なくてはならない。

反歌 L'Envoy

おお 新世界の新たに燃え立たせる(太陽)よ!
いつも変らず決して尽きることがない!

その神聖な光を見る者は

皆 輝く白衣に身を包まれて⁽¹⁾

至福を生み出し下された御身の

不滅の形に似通った姿にされたのだ、

〈眼覚めよ〉、起きよ!

そして古着のように折り畳んでくれますように、この空を

この長い擦り切れた覆い布を、それから輝かせ^{ツェール}掲げて下さ

いませ

御身自らの快活な自我を各々の頭上に

そして御身の被造物を貫き通ってゆかれますように

全てが御身の曇りなき玻璃になつて

この上なく澄み切った昼日中のように透き通つて

傷もなく腐つてもおらず

御身の精霊によって定められている

未来永劫汚れなき状態になりますように。

御身の直接で純粹で覆われていない眼の

視界に相応しい状態に、

御身の心に適った状態に、

御身の誕生と死が迎える筈の状態に、

御身の被造物の悉くが

旅立つてゆき 呻き 見詰めて 叫び求める状態に。⁽³⁾

おお 我らの怨みを御身が晴らし賜うたことを知って
どうして呪いがこれ以上支配しなければならぬのか？
しかし御身の命数は今までのところ未だ

終つていないので 我らは喜々として落ちついて
準備が全て整つて お伴の列が

御身の輝かしい支配に十分相応しくなるまで。

唯、我らを憎む者たちに自慢などさせないでおこう

御身の縫い目なき上衣は襪褌になつてしまつたとか⁽⁴⁾

御身の真実はここ地上では知られていないなどと、

何故なら我らが御身の判断を引き降り降ろしたからだ。

御身の配偶者を悩ます彼らの武器を干上がらせて

御身のお住まいの栄光で

彼らの家を飾らせよう、それから御身の聖者がたに

あの誠実な熱意を与えたまえ、それは消え失せず

激しく燃え上がることもなく、それでも穏やかに

敢然と真実を認めて邪悪を示してくれ。

あらゆる部分に崩壊を引き起す

これら質悪き内密な術の数々を挫いて

打ちのめして沈黙させたまえ、何しろ唯の言葉で

御身の愛する人を剣でよりも酷く傷つけるのだから。⁽⁵⁾

親愛なる（主）よ、これを為したまえ！ それから恩寵を
下しかれて場所という場所を清めさせたまえ。

頑な心の面々に善を行わん気を起させて

我らを御身の御子の血で固めさせたまえ

真物の眠りのように全てを一抱えにして

我らが心をつにして養われるように。

我らを導く人たちに用心深い精神を与えたまえ！

罪は（水と同じく）一時間一時間 人々各々の

戸口へ滑つていつて素早く

流れ込むのだから、やはり遮られない限り。

それ故 彼らの心に御身の法則を書き入れて

これら長年の鋭い判断が彼らの思想そのものを

畏怖するよう取り計らいたまえ、そうなれば彼らの澄んだ

神聖な生命^{いのち}によって 慈悲がこの地上で

やはり支配力を揮つて 恩恵が

すみやかに流れわたることだろう 目下の迫害同様素早く。

そうなれば我らは 戦争と平和のうちに知らされるのだ

御身の奉仕こそが我らの唯一の安らぎなのだ、
平伏した魂で御身を崇めながら、何しろ
我らの悲しい囚われの身を変えて下さったのだから！

聖バシリウスが聖クレメンスを引用する、⁽⁶⁾

神さまが生きている、そして救済者イエス・キリストが生
きている、聖霊が生きている。⁽⁷⁾ [M・五四一―四三]

訳注

- (1) 「ヨハネの黙示録」7・9「F・三四九」。「その後私が見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、教え切れないほどの大群衆が白い衣を身に纏い、棕櫚の枝を手持って、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救いは御座に居ます我らの神と小羊から来たる』と」。
- (2) 「ピリピ人への手紙」3・21、キリストは「私たちの卑しいからだを御自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるだろう」[F・三四九]。
- (3) 「ローマ人への手紙」8・22、「被造物全体が今に到るまで、共に呻き共に産みの苦しみを味わっていることを私は

知っている」。第十九節も参照[F・三五〇]。「被造物は神の子たちの出現を切に待望している」。

- (4) 「ヨハネによる福音書」19・23、キリストの衣は「縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった」[F・三五〇]。先刻の「英国教会」の訳注(4)と同じ箇所への言及。

- (5) 「詩篇」55・21「M・七五二」。「彼の口から出る言葉は脂肪より滑らかだったが、心には鬩いがあつた。彼の言葉は香油よりも優しかったが抜き身の剣だった」。

- (6) この行ラテン語。聖バシリウス(St. Basil the Great, 329-379)は小アジアのカエサレア(イスラエル北西部の古代の港市、ローマ領パレスチナの首都)の司教で、ニッサの聖グレゴリウス(St. Gregory of Nyssa, 330-395)「東方教会の教父・神学者、小アジアのニッサの司教。三位一体の正統教義の確立者」の兄。聖クレメンス(St. Clement I, 90-100)は、使徒直弟子教父の一人で、ローマ教皇(88-97)。

- (7) この二行、ギリシャ語。ミグネ編『ギリシャ教父論』三二巻、二〇一集のうちの『聖霊の書』第二十九巻の中で[F・三五二]。

こうして、自らの奉仕によって悲しい囚われの身である我々を安らぎへと救い出してくれた(太陽)であるキリス

トへの讃歌で、全篇は締め括られる。

改めて述べるまでもないが、『火花散る燧石』は、バイブルへの言及の一大モザイク詩集である。集中、作者自身が明示して使うバイブルの章句は、作品のエピグラフ（一五）や末尾付加（二三）の他、『第二版』の表紙にあるもの（一）と、作中に星印を付して自注として示すもの（一一）を合わせて計五〇箇所になる。他にフォウゲル（F）が、ここはバイブルへの言及だとわざわざ注記してくれるものを数え上げると一八〇余箇所ある。このような、バイブル引喩テクストから成る「書物」である詩集の最後が、駄目押しのように、改めて聖書とキリストへの讃歌作品であった。この詩集の本質を象徴して余りある。

象徴といえ、どうしてもこの際、この詩集の、作者自身の「序」に注目してみたい。当代の英国詩の状況にも鋭い目配りを効かしながら、作者が自らの詩集の本質を象徴的に語っている散文詩の趣きの〈作品〉だからである。この後に繰り展げられる「聖歌」の場合同様、バイブルへの言及を自在にテクストに嵌め込み、古典文中の語句を原語のまま巧みに引用し、譬喩を駆使しながらのこの序文は、ヴォーンの面目躍如たる名品であろう。一六五五年刊行の

「第二版」に初めて付けて全体を整えたものである。

著者の序 次の聖歌各篇への

The Authors' PREFACE To the following HYMNS

この〈王国〉に創意に富む人々、近年の概念で〈才人〉^(ワイツ)と呼ばれる人々が溢れていることは、周知のことだ。彼らの多くはその時間のかなりの部分を全て無益な言葉の入念な探求、もしくは考案といった程度の仕事に、そして有名な〈詩人〉になりたいという空しい飽くことなき欲望に投げ込んでしまっており、自分に与えられている他ならぬあの素晴らしい能力の（自分たちの或る〈先人〉と共に）〈親殺し〉⁽¹⁾と呼ばれる、そして魂殺し〈結果〉となるようなもの（記念碑）を背後に残すのだ。と言うのもそれこそが〈獲物〉⁽²⁾であり、無益な〈詩〉がその揺らぐことなき〈著者〉に確かにもたらずことになる〈月桂〉〈冠〉なのだ。そしてそれは彼らには結構なことだろう、もしそのような自ら進んで学び意図して出版した虚栄物が、自分以外の精神を些かも汚さずにするものなら。しかし、自らの精神を損う場合は、遥かにまずいことになる。こういう〈毒

蛇〉は、その〈生みの親〉より長生きするのだから。しかもその後長い間、(伝染)病同様)全(世代の人々)に感染して、最も優れた(魂)と最も有能な(器)としての人を常に墮落させ、冒瀆する。何故なら彼らを満足させ幸福にするために、(神)の栄えある(御子)は自らの生命を犠牲にし、自らの神聖にして無垢なる心の貴重な血を流される目に遭ったのだから。それは確かにそうではあるものの、こういう人々は記憶に残り続けている、我々には幾らかでも愉快な思いをしながら彼らの記念品は神聖だなどとは言えないのだが。何故と云って、私には真実しか言えないのだから(その熱烈な崇拜者たちには好きなように言わせておこう)、即ち、それに正当にも与えられてしかるべきあらゆる賞讃も(キリスト教徒の)聖なる(詩人)ブルーデンティウスがシンマクスに贈ったもの以上にはならないのだと、

〔ラテン語の詩五行がある〕⁽⁵⁾

英語ではこうなる

輝くように磨かれた〈黄金〉、不滅の中の〈黄金〉の
中でも最も価値ある才人！彼が己が〈造物主〉を神聖に

賞讃する歌を歌ったなら、彼はその御方より淫らな卑しい空想の方を選んで、豊かな稀な様式を罪深い邪悪な内容で損って冒瀆したのだ、
だってそうでなければ、もし磨き上げた〈象牙〉製の

〈道具〉があればあくせく働く人なら
汚れた湿地さえ動かせるだろうから、そして――

こういう比較も何ら唾棄すべきものではなく、適切であると同時に真実でもある。というのも、悪い主題に良い才気を發揮することは(ソロモンが美しくて愚かな女性について言ったように)豚の鼻先に飾られている黄金の装身具のようなものだ、「箴言」11・22。いや(著者)が鋭敏になればなる程その作品にはそれだけ一層危険と死が生ずるのだ。(太陽)が堆肥に降り注ぐ所では、常に何か不潔な害虫が発生する結果となる。著しく敬虔で学のある様な人々は(私は煽動者や(教会分離派人)に干渉はしない)私の時代よりずっと以前に、この病に注目していた。有害な韻文に対する苦情は、平和で従順な精神の人々によってさえこの(王国)では相当古くからある。それなのに、まるでこの根深い誤ちに伴う邪悪な結果は些細なことにすぎ

ないかのように、極く最近では魂を転覆させるのを助けるようなもう一つ別の趣向が繁栄し始めた。韻文の〈天才〉を欲する人々は翻訳することを始めるのだ。そして人々は（全ての期間に）様様な〈外国の虚栄物〉を豊富に供給されている。それでフランスとイタリヤのこの上なく好色な作品が、ここに取り入れられて〈英語〉にされている。そうしてこれが（悲しいことに観察されるとおり）大いに支持され成功しているので（適切に表現されているように）〈空想伝奇物語〉のようなものは人気がない。それで甚だしばしば（もしそういう〈特性〉が〈蕪の繁み〉⁶でないとしても）それを購入する人は、この下等な製品を名譽ある人々から受け取ることになる。彼らは思い止まる理由を望まないのだ、最初のうちの他ならぬ種子から発生したのだから、多くは個々に自分だけの不幸で、何かしら溶解してゆく〈聖人伝説〉のようなものだ。

こういう虚栄状態を（分別年令を過ぎてから）続けるのは、敬虔な真面目さを放棄することで、弁解のしようがない。そして最後までそうし続けるのは、不純な考えや下卑た奇想を弄して絶え間なく官能的にごろごろ放縦に暮らすことよって〈神〉の神聖な勸告を故意に軽蔑すること

あり、そういうものの〈著者たち〉だけでなく更にもっと多くの、作品を伝達される人々をも汚すものだ。もしもつまらない言葉の全てに責任を問われるべきものなら、また、墮落した伝達内容は我々の口から出してはいけないものなら、彼らの状況は（私はあなた方に懇願する）何と絶望するしかないものか、何しろ彼らは生涯ずっと、それも単に意図しただけで淫らな作り話を研究し、それから注意深く記録し公刊し、恩寵に充ちた生活の代りに自分の読者に罪深い死を与えようとするのだから。ある人に賢明にも考えられ信心深く言われたものだ、彼は無益な書物は一切読むつもりがない、己自身の魂への愛に関しても、そういう書物を作った人の魂への憐みに関しても、何故なら（と彼は言った）もし私がそういう書物によって墮落させられるならその〈作者〉は立ち所に私を病に陥らせる原因となるだろう、そして最後の審判の日に（もう死んでいても）その申し開きをしなければならぬのだ、何故なら私は彼が背後に残した彼の悪しき模範によって墮落させられたのだから。私は何も書くまい、私の後に来る人々を傷つけないように。私は何も読むまい、私の前に行く人への罰を増加させないために。私は書くことも読むこともしないでこう、

私が自らの魂にとつての敵になつたりしないように。生きていけば私は余にも多く罪を犯す、生きている間より長く私が邪悪な状態を続けずすむように。神聖な権威ある名言には、死したる者は罪から解放される⁽¹⁾とある。何故なら肉体のないそのような状態ではもはや罪は犯せないのだから。しかし無益な書物を書く者は、己の力でもう一つの肉体を作つてそれで常に生きて罪を犯すのだ(死後も)、生きていた間にそうだったようにいつも素早く、忌むしく、そう考えるだけで、この悪辣な病氣に対する十分な〈解毒剤〉になるに値する。

それでここで、私は自ら腹藏なく告白することで正当な厳しい譴責を防ぎたいので思い出さなければならぬ、私自身長年の間、この病氣そのものにぐつたりしてきて、回復後まだ余り間がないことだ。しかし(それに対して〈神〉に感謝を!)私は自らの最大の愚行を、あの御方に救われ助けられてやめたのであり、私がやめずにすんだものは(私は思っているが)あの水脈の大半がそうであったように無害なものであり、おまけにそれには多くの高潔なものと同程度の敬虔なものとの混合物が挿入されている。私がそれらについて話すことは真実であるが、だから短所

が軽減されるなどは誰にも誤解してもらいたくない、さもないと、まるで私が、そういう短所を、あるいは私自身を(弁護)しようと思つて見たいだから。私はその両方に、特別な悲しみなしには、そして私の(全能の救い主)による浄化とその貴重な言葉の奔流なしには決して贖えないほどの、非常に多くの罪を意識しているのだ。それでもし世の中が、私の要求を認めてくれる程慈悲深いなら、私は正にここでこの上なく慎しく熱意を込めて、ああいうものを誰も読んでくれないようお願いうものだ。

しかし無益なあるいは官能的な主題は、このような(冊子類)にあつては必ずしも毒にはならない。(著者)の中には甚だ不敬にも大胆なのがいて、(聖書)や(神に関わる聖なる物)⁽²⁾を、不遜な奇想で粉砕する者も現れた。だから(そのようなものを、私は心の悲しみなしに口には出せない)あの自暴自棄の冒險譚の中には(私は思うのだが)〈英語の韻文〉の主要な、もしくは最も学のある(作家たち)の書いたものと見做してもよい。

他の、後の時代の作者たちは、公衆の気晴しと呼応するあの邪悪な(天才)によつて(おそらく)墮落させられて、己が著作に(冒瀆的表現)、恐ろしい(呪詛)、及び甚だ酷

い故意の下品を詰め込んだ。しかし、これ程札付きの悪質な作品の出版にすぐ続いて起る打撃は、〈書籍出版業組合¹³⁾〉の価値にずつしり掛つてくるので、この組合はそういう作品を手中にすると良心に照して拒絶しなければならぬ。魂を傷つけることになるような利益ほど悲嘆にくれさせる損失はない。下劣なもの、不敬なものを印刷する人は、「箴言」に出てくるあの狂人なのであり、燃え木、矢、及び、死を投げつけるのだ。

このように広く普及している、人を喜ばせる害悪を抑圧するのは、〈行政官〉の権力に全て掛つてゐるわけではない。と言ふのも、それは、印刷を受け入れられなくなると〈草稿〉の形で国外に飛び出してゆくことになるからである。本当の治療は、全く優れた才能の人々の胸のうち一つにあり、無益なしかも悪辣な話題を神聖な〈主題〉及び〈天国への賞讃〉と賢明にも交換することに依るので。これを実践することは容易であり、たとえこの世では最も困難なことではあつても、その報いは甚だ栄光に満ちているので、それを実践すれば限りなく報われるのだ。何故なら、多くの人を義に向かわせる人々は永遠に星のように輝くだろうから。ここから次の如き否定し難い推論が生ずる、即

ち、多くを墮落させることは反対方向の仕事ではあるが、償いもまたそうに違ひないということである。だから私は知つてゐるのだ、彼らのために取つて置かれてゐるものは皆無であり、永遠に真黒な闇なのだ。そこから生ずるのが（おお〈神〉様！）あらゆる悔い改めであり改心した〈精神〉なのだ！

こういう汚れた圧倒的な流れの方向転換を試みて何らかの効果を収めることに成功した最初の人物は、あの幸いな人ジョージ・ハーバート氏で、その神聖な人生と韻文は、多くの敬虔な〈帰依者〉を（その末席を私は穢すのだが）得て、同時代の最も隆盛で崇拜されている才人¹⁷⁾を初めて頓座させたのである。彼以後には数人が続いた——しかし足取りは等しくない¹⁸⁾。彼らは力を得るといふよりは流行になつたのだ。そして彼らが彼と大きく隔つてゐる理由は、精神と資質の違いの他に（何しろ彼の器の大きさは著しい）、彼らは完璧よりもしばしば印象とページを多く費すことで容易に集成できそうな韻文を目指してゐるからではないかと私は思うのだ。そこから、あの広範な、弱い、瘦せた概念が飛び出してきたのであり、それでは最も心の傾きがちな〈読者〉に、信仰に到る何らかの養分や助力を与えるこ

とは殆どできないだろう。真実の実地の敬神の念から流れ出るのでなければ、彼らがそういうもので以って海外で、本国でもおよそ馴染んでいないような効果を挙げることもなど不可能というものだった。唯、ありふれた精神の産物にすぎず、印刷に付されること以外何も考慮せず、単にペンを手にするだけのあの軽い気分を迸らせただけなのは明らかなのだ。全く確かなことだが、敬虔な〈主題〉と〈瞑想〉に心を向けることは（もしも敬虔な事柄のためにそうされるなら）完璧へ向かつての大きな一歩なのだ。それは献身と神聖へと洗練されることでありそれで収まりがつかことなのだから。そして更にそれは、我々に（非常に容易に伝わりうるのはあの人を愛する精神なのだが）あの天上の飲食物を幾らか少し試食させてくれることになるが、それは、神聖であることに並みにあるいは冷淡にしか関心を寄せない人々には下されることはあつてもめつたにないことだし、しかもその時でさえ甚だ惜しみ惜しみなのだ。しかし、この種の〈聖人伝〉とか神聖な書き物に秀でたいと欲する者は、完璧と真正な神聖さを目指して（どうあつても）骨折らねばならない、扉が天国で彼に開かれるように「ヨハネの黙示録」四・一。そうすれば彼は（ヒエロテ

ウスと神聖なハーバート氏と共に）〈真正なる聖歌〉⁽²⁰⁾を書くことが出来るだろう。

ある程度この効果が上がるように私は〈教会〉に、その榮譽ある〈首長〉の保護と管理の下にこの私の乏しい〈才能〉を委ねる許可を冀つた。そうすれば（もしそれを忝くも受け取つて同調して下さるなら）私にとって個人としてそうだったように今や公の面でも役に立つようにして戴けるだろう。それを通読してあなた方は（ひよつとして）ある幾節かにはその由緒や理由が何だかそつ気ないように思われるかも知れないが、もつと近くに引き寄せてはつきり目を凝らして見て下さるなら（尤もそれでは（多分）あなた方の好奇心は鎮まるかも知れないが）とは言つてもそれでも多くがあなた方に更に一層有利になる助けにはならないだろう。それでそれ故、私はそういう一節を、それに既に認められている範囲で受容して下さるよう、あなた方に願わねばならない。本書の最後の〈詩篇〉に到るまでに（その間違いがここで防止されていなければ）あなた方は全てを父なし児だと、また、この〈版〉は父の死後生れだつと、判断なさることだろう。と言うのも（実際のところ）私は死に近かつた⁽²²⁾からであり、依然として死からそれ程遠

くないのだから。それがあの、厳かな既成の服装をしてい
る必然の理由だったのであり、あなた方が今このような印
象を見出し出すことになっている所以だ。

しかし全て肉なるものに靈を与えられる神は、私が肉体
の中に探し求めるよりも遙かに多い私の所持するものを使
うのを許して下さった。それで私が予期して死の伝言を
(彼の御方の助けを借りて)用意した時、その御方は私に
命で以って答えて下さったのだ。その御方の栄光と私の大
いなる利益に役立って欲しいものだ。私は葉だけではなく
幾らか果実もつけて繁りますように、彼の御方の貧しい
〈被造物〉のこういう希望と真摯な欲求を、その御方が御
自身の親愛なる〈御子〉のために、完成させ成就させて下
さいと、私は慎しく懇願するものである。その御方と最も
神聖で愛情深い〈精神〉と共に、〈御使いがた〉と〈人々〉
と彼の全〈作品〉によつて、〈あらゆる栄光〉、〈叡智〉及
び〈支配権〉が、この束の間にして〈永遠なる〉〈存在〉
の形でその〈御子〉のものとされますように、アーメン。

スケスロック近くのアスク河畔ニユートン

一六五四年九月三十日

おお、イスラエルの希望たる〈主〉よ、御身を見棄つる
者は全て恥づべし、御身を離れ去る者は全て大地に名を書
かるべし、彼らは生ける水湧く泉たる〈主〉を見棄てたれ
ばなり。

我を癒したまえ、おお〈主〉よ、されば我癒さるべし、
我を救ひたまえ、されば我救はるべし、御身は我が健康そ
のものにして、我が偉大なる解放者なればなり。

我は言ひたり、我が盛んなる日々を断ち切つて、我は陰
府の門へと赴き、我が残りの年月を奪はれてしまひしと。

我は言ひたり、我は〈主〉に、生きとし生けるものの
〈土地〉にある〈主〉にさへ、相いまみゆることなしと、
我は世界の〈住民〉と共に人類を見ることもはやなしと。

おお〈主〉よ！御身によつて人類は生き、御身から我
が精神の命が生ず、それ故御身が我を取り戻し、我を生か
し下さるなり。

御身は我が魂を愛して墮落の穴から救ひ出し下さりつ、
御身がその背後に我が罪の全てを投げ棄て賜ひし故に。

御身はその名のために御身の怒りをかなぐり捨てられつ。
御身への賞讃を御身は我から控へさせつ、われが断ち切る
ることなきやうにし賜ひしが故に。

墓は御身を褒め称ふることかなはぬ故、死は御身を祝は
えず。奈落へ落ちゆく者たちには御身の真実に到る望みな
し。

生ける者、生ける者、彼は御身をほめ称ふべし。われが
今日なせるごとく、〈父〉なるものはその子らに御身の真
実を知らしむべし。

おお〈主〉よ！ 御身は慈悲深くあられつ、御身は我が
命を墮落から取り戻し下されつ、御身は我を我が罪から解
放し賜ひつ。

人を欺く虚栄を追ふ者は、己自身の慈悲心を棄て去るも
のなり。

それ故御身の歌は我と共にあり、我が祈りは我が命なる
〈神〉に捧げらる。

われが赴くのは我が〈神〉の祭壇にして、我が若き日の
喜びたる〈神〉なり。そして御身を恐れて我は、御身の聖
なる神殿へ向けて崇拜を捧ぐ。

我は謝恩の声を以つて、御身へ犠牲を捧ぐ、我は誓いを
立てつるものに支払はむとす。救済は〈主〉のものなれば
なり。⁽²⁵⁾ [M・三八八―九三]

訳注

(1) *Partridges*. グロサール (Grosart) の示唆によれば、先
人とはロバート・グリーン (Robert Greene, 1558-92) [英
国の劇作家、詩人。散文物語の *Pandosio* (1588) はシェイ
クスピアの『冬物語』の種本]で、彼は読者に促している
(*Groats-worth of Witte*, ed. G. B. Harrison, Bodley Head

- Quartos [London, 1923], p.40) '自分の「虚しい夢想」や「愚行」は、「読者が多くの親殺しを扱うように扱って火に投げ込み、Telegones [テレゴノス (Telegonus)] からの語で、彼はオネウッセウスとキルケーとの息子で、知らずに父を殺す」と呼んでくれればいい、というのも、今その夢想や愚行はその〈父親〉を殺すからで、そこに書かれておる低級な詩行が悉く私の心には深く突き刺す傷となっており、誰にしるそれを読むのに費してくれる無駄な時間は私の魂に途方もない悲しみをもたらすのだから」と[F・二五五]。
- (2) *Bozbetov*. = Prize in the games. [同]。
- (3) *Prudentius*, Aurelius Clemens (348-410) 'スペイン生れのローマのキリスト教徒の詩人' *Psychomachia* 『魂の闘い』。
- (4) *Symmachus*, Saint (?-514). ローマ教皇 (498-514)。
- (5) See *Contra Oratorem Symmachi*, I, 635-39, in *Prudentius*, tr. H. J. Thomson, Loeb Library (1949), I, 398. 但このテキストの中の“quis templat”が、ヴォーンの引用では“qui tentat”となっている [F・二五六]。 [M・七二七]。
- (6) *Ioy-bush*. 陰蔽もしくは騙す手段の一つ [F・二五七]。この意味は「もしもさういう人々を名譽ある御仁と呼ぶのが単なる見せかけでないなら」 [M・七二七]。
- (7) 「マタイによる福音書」 12・36 [F・二五七]。
- (8) 「エペソ人への手紙」 4・29 [同]。
- (9) 「ペテロの第一の手紙」 4・10-11 [同]。
- (10) オウエン・フェルサム (Owen Feltham, 21602-68)。彼の著書 *Resolves*, II, i (ed. Cumming, London, 1820, p.208) の中の論文「無益な書物について」“Of Idle Books”では、もっと簡潔な文章になっている [同]。
- (11) 「ローマ人への手紙」 6・7 [F・二五八]。「森」 [The Timber] の最後にも引用される (本誌第二〇〇号四九ページ)。
- (12) *sacred Relatives of God*. = Holy things that relate to God. [F・二五九]。
- (13) *The Stationers*. = The Stationers' Company. [同]。一五五七年に結成されたロンドン市の書籍販売業者、印刷業者、文房具商などを含む同業組合 (ギルド) で、書物出版前にここに登録して許可を得なければならなかった。
- (14) 「箴言」 26・18 [同]。
- (15) 「ダニエル書」 12・3 [同]。
- (16) 「ユダの手紙」 13 [同]。
- (17) 誰であるか確定はされないが、ダン [John Donne, 1572-1631, セント・ポール大寺院の首席司祭を晩年十年間勤めた聖職者、詩人。形而上詩人の代表者・指導者] とヘリック [Robert Herrick, 1591-1674] がその人ではないかと示唆されている [F・二六〇]。／チェンバースは控え目に

ダンを示唆する〔C〕第一卷二九七頁)が、ダンが聖職に就くのはハーバートが二二歳の時なので年令の点で疑問。ダンが世俗詩から宗教詩に変わるのにハーバートの影響があったとヴォーンは誤解しているのかも知れない〔H・一〇一〕。／＼リックを指すか。彼の詩は一六二〇年代に大いに賞讃されていた。彼の代表作「ヘスペリディーズ」*Hesperides*と共に一六四八年に出版された詩集「崇高詩」*Noble Numbers*には所々にハーバートの影響がみられる〔M・七一七〕。

(18) *Sed non passibus aequis.* = "But with unequal steps" ウェルギリウス『アエネーイス』[Publius Vergilius Maro, 70-19 B. C.; *Aeneid*] II, 712-4 [F・二六〇]。

(19) チェンバーズの示唆どおり、おそらくフランシス・クオールズ [Francis Quarles, 1592-1644, 王党派の宗教詩人、教訓詩「寓意画」*Emblems* (1635)] を指すだろう〔M・七二七〕。

(20) *Hierothens.* 紀元一世紀のアテネの司教だろう。偽ディオニシオス (Pseudo-Dionysius [四〜五世紀の作家、神秘的な作品を書いた]) によって、自分の師であり、愛の聖歌の作者だとして言及されている〔F・二六〇〕。

(21) *A true Hymn.* ハーバートの詩の標題「Hymne になつてゐる」〔回〕。彼の最初の読者たちの興味を掻き立てた詩として、ウィルコックスは、ヴォーンのこの箇所を「現代批

評」欄の最初に挙げる〔W i l・五七五〕。五行連四連、二十行の詩。

(22) 「ピリピ人への手紙」2・27、30参照〔F・二六一〕。「実際彼は瀕死の重病にかかった」〔彼は：死ぬほどの目に遭った〕。

(23) 「民数記」16・22〔同〕。

(24) *Sketh-rock.* ブレコン下方のアスク河畔の町〔同〕。

(25) 以上十四の序詩は、以下の章句の引用ないし改作である。「エレミヤ書」17・13、14／「イザヤ書」38・10、11、16、19、48・9／「ヨナ書」2・6、8、9／「詩篇」5・7、42・8、43・4〔M・七二八〕〔F・二六三〕。

この、先般(本誌第二〇一号一三ページ)「作者自身の長文の凝った些かならずくもった調子の」と述べたとおりの「著者の序」と先刻見た「反歌」とで、ヴォーンの燧石が散らす火花は包まれている。その姿を更に点検し続けたい。

* 参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets.* London: The Macmillan Press, 1992.

- [㉑] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.
- [㉒] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.
- [㉓-㉔] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.
- [㉕] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.
- [㉖-㉗] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [㉘] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [㉙] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Sileurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2 vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [㉚] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㉛] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [註崎宗治記 『曖昧の七つの型』 (研究社 一九七四) 三二二—三二五]。
- [㉜] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday, 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㉝] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㉞] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㉟] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [㊱] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [㊲] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [㊳-㊴] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford : 1932 ; rpt. New York : Haskell

- House, 1966.
- [H⁹] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [L] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [LH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [M⁻] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [M⁺] Miner, Earl. *The Metaphysical Made from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [M⁻] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [M⁻] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [P] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Sicx Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [S] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [S⁺] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シムモンズ編注『T・S・エリオット講義』村田俊一訳(松柏社 二〇〇一)〕。
- [S⁻] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [T] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Im-*

agery. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.

[M] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.

[MG] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1 st ed. 1930.

[MH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.

[M-i] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.

〔川崎1〕「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(川崎寿彦『蕃薇をして語らしめよ―空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四―一九八。)

〔川崎2〕川崎寿彦『鏡のマニエリスムールネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二―一五八。

拙訳での〈〉付きとコチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

*拙論「ヘンリー・ヴォーン小考(一〜四)」は、二〇〇七年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。